

秋田成就教授 田沼肇教授 退職記念号に寄せる

ISHIZAKA, Etsuo / 石坂, 悦男

(出版者 / Publisher)

法政大学社会学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

社会労働研究 / Society and Labour

(巻 / Volume)

40

(号 / Number)

1-2

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

3

(発行年 / Year)

1993-07

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00018677>

秋田成就教授 田沼 肇教授 退職記念号に寄せる

石 坂 悦 男

(前社会学部長)

この度、秋田成就先生と田沼 肇先生が法政大学社会学部を御退職される。折しも学部創立四〇周年の記念すべき年である。

両先生の本学部との関わりは、秋田先生が一九五七年に、田沼先生が一九六三年に、助教授として就任されて以来、各々三六年間、三〇年間の長きに渡る。この年数は、本学部の四〇年の歴史の重要な部分とほぼ重なる期間である。その間、両先生は法政大学と社会学部の教育と行政において中心的な役割を担われると同時に、それぞれのご専門の学問領域における新進気鋭の論客・若手研究者として、また学界の重鎮として、別掲の詳しいご紹介にみるような多くの優れた業績を残された。

本学部が今日のような有数の社会学部に成長し発展してきたことへの両先生の貢献は、実に大きいと思う。本学部の教育・研究の発展の節々は、必ず両先生の多大なご尽力に与っている。

一九五二年、麻布校舎においてわずか一三人の専任教員でスタートした本学部創立時には、日本の大学では社会学部という名称の学部はまだめずらしく、大変ユニークな存在だったが、その後学部の規模も年々大きくなり、質的に

も目覚ましい発展を遂げた。ここ数年一万人をはるかに超える入学志願者をむかえ、学生数三七〇〇人、専任教員は客員をも含めて六〇人を擁するほどになっている。

本学部の教育・研究の特徴は、学部前史から培われた社会問題・労働問題を実証的に分析するいわゆる social sciences の学問・研究の理念と方法を継承して、たえず時代と学問・研究・教育との緊張関係を敏感に反映して形成されてきた。こうした社会学部創立当初の学部教育・研究の基本的な枠組みとその継承・発展に、秋田、田沼両先生は深い繋がりがある。秋田先生が本学部に就任される以前、東大法学部を卒業後の大学院時代に、社会学部の前身に関わりある大河内一男教授に師事されて、その後東大社会科学研究所の助手を務められたこと、また田沼先生が東大経済学部を卒業後、商工省調査統計局、大原社会問題研究所に勤められたことは、現実社会と研究・教育との緊張関係を重んじる本学部のスタイルの形成に大いに寄与したと思われる。本学部の教育・研究の対象が、その後、当初の狭義の社会問題・労働問題から日本社会と国際社会の諸々の課題全般に及ぶと同時に、それらをさまざまなアプローチでより総合的、学際的に扱うように発展してきているが、その基礎は学部の初期に形成されている。

さらに、両先生はこのような学部の教育・研究を実際に遂行するための物的条件や教育体制をも重視され、その整備にも力をそがれた。大学全体の行政において、学部長をはじめ多くの要職に就かれ再三重要な役割を果たされたことも、このことと深く結びついている。本学部が新たなキャンパスを求めたのは学部教育の充実と大きな飛躍を期してのことであった。とくに多摩キャンパスへの移転は、法政大学の将来と社会学部の教育改革を賭けた、カリキュラムを抜本的に改革し、教養課程と専門課程を合体させ、コース制を導入した四年間一貫教育を実現させるためであった。それは、今日の大学教育改革をめぐる状況に照らせば、まさに時代を先取りした、先見性に富む大英断だったといえようが、そのための大学と学部における合意形成に、両先生は人一倍大変ご苦労された。

この数年の世界的な激動は、まさに「多様化と統合」をめぐる新しい時代への胎動といえる。大学は、こうした時代の大きな変化と課題に応えることができるであろうか。大学が大学であり続けるためには何が最も重要であるかが改めて問われていることに、われわれは心しなければならぬ。戦後の日本の大学教育がいろいろな意味で転機にあるいま、本学部は、創立四〇周年を一つの画期として、新しい時代に対応した学部教育・研究にむけていっそうの飛躍が求められている。このような重要なときに、秋田、田沼両先生がご退職されるのは、なんとも惜しまれることである。

真理を探求する学問精神に支えられて、自らの研究をより広く深く進められ、その学識の上に本学部の教育・研究に情熱を傾けて来られた両先生が残された貴重な財産を確かに継承することによって、法政大学社会学部の明日への発展を期したいと思う。

両先生の長年のご尽力に重ねて心から感謝を申し上げて、本記念号を捧げる次第である。

(一九九三年三月三十一日)